



源信弘開一代教

偏釋安養勸一切

報化一土正翁立

親鸞聖人は九歳で出家され、比叡山に上つて二十年間ほど修業されたそうです。しかし、ご自身の青春真っ只中を過ぎた比叡山の修行の様子を、ご本人が書き残されたものはありません。

比叡山延暦寺は、山全体が修行の場の広大な寺院で、境内は大きく三つの地域に分かれています。有名なのは、総本堂の根本中道がある東塔(とうとう)、それと釈迦堂や常行堂・法華堂がある西塔(さいとう)。そして一番北に位置するものが源信僧都ゆかりの横川(よかわ)です。親鸞聖人のこの頃の事は何も語られておらずよく分かっていませんが、聖人の妻、恵信尼様のご消息(じょうそく)には、「堂僧つとめておはしましける」と記されているので、西塔の常行三昧堂において、常行三昧をされたいたと考えられています。

源信和尚は九百四十二年生まれ、一〇一七年没。親鸞聖人は一一七三年生まれですので、比叡山での修業時代、二百年ほどの時間差があります。時間の差はあつたにしる、これまでの海外の高僧様とは違い、同じ場所で生き、修行し、生活した、同じ空気を吸つて生きた人からの学びは、経文などの言葉で学んだいわゆる教義での教えとはまた別の、実感的、靈感的な学びがあつたのではないかと思われます。思想とは直接関係ないのかもしれません、自分の手本にする先師の人生、ファミリーヒストリ

ーはその人から学ぶ者にとって、人生に深く影響してくるものです。

この源信和尚も幼くして（七歳の時）父を亡くされています。しかし、お母さんが仏教への

信仰心の強いしっかりした女性だったようで、その影響により九才で出家されました。そして十五歳で『称讚淨土經』を講じ、村上天皇により法華八講の講師の一人に選ばれ、下賜された

十五歳で『称讚淨土經』を講じ、村上天皇により法華八講の講師の一人に選ばれ、下賜された

褒美の品（布帛（織物）など）を喜び勇んで故郷で暮らす愛しい母に、褒めてもらおうと送ったのだそうです。ところが、お母様は源信を褒めるどころか、いさめる和歌を添えてその品物を送り返されました。その諫言（かんげん）いさめることば）に従い、名利の道を捨てて、横川にある惠心院に隠棲し、念佛三昧の求道の道を選ばれました。その母の諫言の和歌とは「後

悲しきまことの求道者となり給へ」というものでした。その後も権少僧都という位についても、母の諫言通り、名誉を好まず、わずか一年で権少僧都の位を辞退されたのです。親鸞聖人も、群れを嫌い、権威を嫌い、束縛を嫌い、ただひたすら、一心に真実を求め歩まれた方でした。

そういえば、勝林寺の前住職も幼いころに父を亡くし、そのあと氣丈に寺を守つた母も亡くなしたのだと、よく話をしていました。その話の中には、どこか源信僧都のファミリーヒストリー、親鸞聖人のファミリーヒストリーが、重なつていたように思います。（文責 住職）

みのりを聞く会

二九日（土） 永井道則宅 三回忌

二月十一日 仏婦評議員会

二月九日 仏婦評議員会

三月二十日 仏婦評議員会

四月十一日 觀桜会

五月十六日 降誕会

五月二十八・二十九日 念仏奉仕団

六月十四・十五日 納骨研修旅行

七月四日 永代経

八月八日 全戦没者追悼法要

八月十九日 仏婦子ども研修会

十月十七日 敬老報恩講

十一月十四日 おみがき奉仕

十一月二十一・二十二日 報恩講

十二月二十七日 餅つき

報告

代議員会において、任期満了に伴い勝林寺新責任役員および新総代が承認されましたのでご報告いたします。

責任役員 中嶋英樹様
総代会長 稲葉保夫様
総代 足立幸夫様
齋藤清忠様

総代 永井正人様
田中重雄様（栗尾）

一日（火） 藤山文子宅 一周忌
二日（日） 山田輝幸宅 三回忌
三日（土） 薮山敏昭宅 忌明法要

二六日（火） 平野洋治宅 忌明法要
二七日（水） 兵庫教区教区会 常備会

四年間お世話になります。よろしくお願ひいたします。なお、永きにわたりご尽力いただきまします。以下の方に勝林寺より感謝状と記念品をお贈りいたしました。

同様く代議員会で令和二年度勝林寺行事予定が承認されましたので、ご報告いたします。

二月十一日 仏婦評議員会

二月九日 仏婦評議員会

三月二十日 仏婦評議員会

四月十一日 仏婦評議員会

五月十六日 仏婦評議員会

五月二十八・二十九日 念仏奉仕団

六月十四・十五日 納骨研修旅行

七月四日 永代経

八月八日 全戦没者追悼法要

八月十九日 仏婦子ども研修会

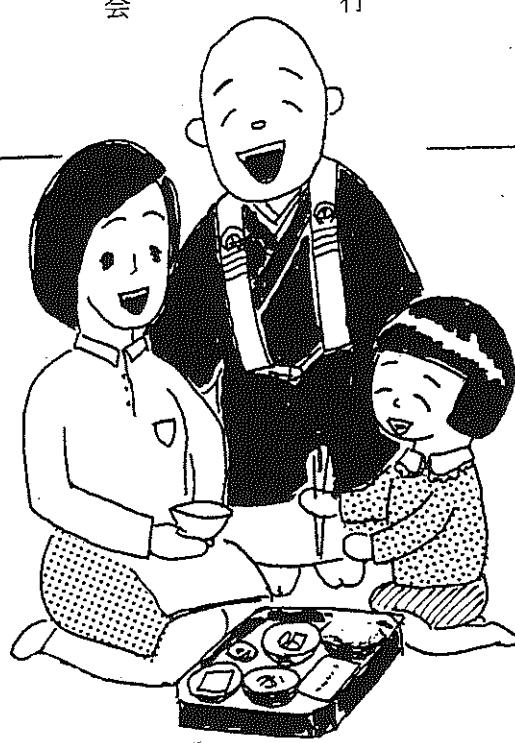
十月十七日 敬老報恩講

十一月十四日 おみがき奉仕

十一月二十一・二十二日 報恩講

十二月二十七日 餅つき

二月 勝林寺 予定



（敬称略）

「もの」のはなしと「ハハ」のはなし

親鸞は、真宗の教えを語るについて、いつも「もの」のはなしと、「ハハ」のはなしを明確に区別して明かしております。

その「もの」と「ハハ」の違いは、たとえば「生命」といえれば、それは客観的、抽象的な観念の世界で捉えられた「もの」(名詞)を意味しますが、それを「生きる」と表現すると、それは具体的な経験の世界で捉えられたところの、運動態としての「ハハ」(動詞)で、そこには必ず主語がともないます。

「生命」という、主語のない「もの」と「生きる」という、主語をもつた「ハハ」の相違です。すなわち、仏心のほか的な「もの」として捉えられるが、親鸞は、その阿弥陀仏や名号を、「もの」ではなく、つねに具体的な経験、「ハハ」として捉えるわけです。そのことは、たとえば、親鸞は、真宗においては、私の日々の称名念佛などいますが、また時には、それを仏の名号そのものだともいふわけです。すなわち、行とは私における称名でありながら、それはまた、阿弥陀仏の名号だともいうわけです。親鸞の著作をみると、称名のことを名号といい、名号のこととを称名ともいっております。すなわち、仏の名号とは、單なる仏の名前、物体としての「もの」ではなくて、私が日々において称えるところの称名念佛は、それはそのまま、仏の私に対する名のり、その喚び声だというのです。だから、仏の名号と私の称名とは即一するというわけです。

しかし、本願寺の伝統教学では、その抽象的な「もの」として捉え、その名号の中に、いろいろなパワー、功德がこもっているから、それを「もひつ」ということが肝要だと教えます。かくして真宗の法義が、もひばら二元的、觀念

的な「もの」の説明に終わって、具体的な「こと」としての経験にならないのです。

そのことは、また真宗における信心についても同じです。親鸞は、信心を、時には眞実心と云って、それが仏心のことであるとも言います。

かくして親鸞は、私における信心とは、その仏心が私に届いてることに、深く「めざめ」で

いくことだといいます。すなわち、仏心のほかに私の信心はありません。その意味に

おいて、私の信心とは、まったく具体的な経験の世界のことです。それはまさしく、私における

「ハハ」(動詞)のはなしなのです。『歎異抄』

に、他力の信心について、「たまわりたる信心」

とあかすのは、そういうことを意味しているわ

けです。

しかしながら、本願寺の伝統教学では、その

信心を、まったく主客二元論、対照的に「もの」

として捉えて、仏を信じるとは、私が仏に向かって、一心一同に「たのむ」ものであり、また

その名号を「もひつ」ものだと説明いたします。

したがって、そこでは、その信心とは「ハハ」

として、具体的に経験される」とはさせん。

かくして、まことに親鸞の教えは、行も信も、

単なる「もの」のはなしではなく、わたしにお

ける確かな動態としての、「ハハ」について明か

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)

法語カレンダー一月

生のみが 我らにあらず

死もまた 我らなり

どすん

「カール」が来てから一年半が経ちます。一ヶ月後から始めた早朝の散歩は、最初の一ヶ月は住職がひとりで、毎日二人と一匹で散歩をします。夏場は五時半、冬場は六時から一時間かけてお城山の公園をゆっくり歩いたり体操をしたり。

現代社会においては、死生観や死生学という言葉が注目されています。死生学は、死が根本にあって生を考えることを基本としています。

神界』の所収論文で「絶対他力の大道」について、私の信心とは、まったく具体的な経験

の世界のことです。それはまさしく、私における

「ハハ」(動詞)のはなしなのです。『歎異抄』

に、他力の信心について、「たまわりたる信心」

とあかすのは、そういうことを意味しているわ

けです。

しかしながら、本願寺の伝統教学では、その

信心を、まったく主客二元論、対照的に「もの」

として捉えて、仏を信じるとは、私が仏に向かって、一心一同に「たのむ」ものであり、また

その名号を「もひつ」ものだと説明いたします。

したがって、そこでは、その信心とは「ハハ」

として、具体的に経験される」とはさせん。

かくして、まことに親鸞の教えは、行も信も、

単なる「もの」のはなしではなく、わたしにお

ける確かな動態としての、「ハハ」について明か

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)



として、具体的に経験される」とはさせん。

かくして、まことに親鸞の教えは、行も信も、

単なる「もの」のはなしではなく、わたしにお

ける確かな動態としての、「ハハ」について明か

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)

として、具体的に経験される」とはさせん。

かくして、まことに親鸞の教えは、行も信も、

単なる「もの」のはなしではなく、わたしにお

ける確かな動態としての、「ハハ」について明か

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)